

しょうが【根しょうが】（普通）

栽培暦

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型									
普通	催定 芽植	—————			土 寄 せ	—————			収 穫

栽培の特徴とポイント

元来高温かつ多湿の環境を好み 18 以上で塊茎が発芽するが、生育適温は 25～30 であり、12 以下の環境下では枯死または株が衰弱する。土壌 pH は、6.0～6.5 が適する。栽培土壌は、有機質に富んだ肥沃な土壌が適し、連作を嫌うため、3～4年の輪作が必要となる。また、さといもの後作では、トビムシの加害により、発芽不良を起すこともあるので避ける。

品 種

- 小しょうが群（金時、三州赤芽、三州白芽）
 - ・ 1 株 300～400kg/株程度の塊茎と小さく、「葉しょうが」としての利用が多く「根しょうが」利用はほとんどみられない。
 - ・ 葉、茎とも細く、密生しやすい。
 - ・ 葉柄の基部や新芽が鮮やかな紅色となる。
 - ・ 金時、三州赤芽、三州白芽の 3 品種では、金時が最も早く生育する。
- 中しょうが群（千倉中太、豊後中太）
 - ・ 1 株 500～600kg/株程度の塊茎になる。「根しょうが」としては、柔かい。
 - ・ 草丈は 50cm 程度まで伸びる。
- 大しょうが群（豊後太、おたふく）
 - ・ 主に「根しょうが」として利用される。
 - ・ 1 株 700kg/株程度の塊茎になる。
 - ・ 草丈は 70cm 程度まで伸びるが、分けつは少ない。
 - ・ 辛味は成熟するにつれ増加する。

催 芽

1 種塊茎の準備

品種群	種塊茎必要量	1 株当りの分割重
小、中しょうが群	450kg / 10 a	小しょうが群：40g/株、中しょうが群：60g/株
大しょうが群	600kg / 10 a	大しょうが群：100g/株

準備した種塊茎を上記を目安に分割し、半日程度陰干しする。その後、根茎腐敗病に登録のある薬剤で消毒しておく。

2 催芽作業

- 1) 苗床面積 50～80 m²（本圃 10 a 当り）
- 2) 床作り トンネル利用であれば、籾殻や稲わらの上に、野菜類の育苗床であればそのまま砂を 12cm 程度乗せる。

- 3)温度管理 催芽適温は 27～30 。最低でも 20 は確保する。
 4)催芽期間 伏せ込みから発芽まで 20～30 日間。草丈で約 10cm になるまで催芽する。催芽床で乾燥させると根を枯らすので、随時灌水する。

本ば管理

1 施肥

施肥例 (kg / 10 a)

肥料の種類	総量	基肥	追肥	成分量		
				N	P	K
完熟堆肥 注1	2,000	2,000				
苦土石灰	150	150				
ようりん	40	40			8.0	
I B化成S 1号	80	80		8.0	8.0	8.0
やさい燐加安S 5 4 0 注2	20		20	3.0	2.8	2.0
N K化成E 9 8 9号 注3	60		60	10.8	-	10.8
合計				21.8	18.8	22.8

注1：(完熟)堆肥は、畝間に施用する。

注2：1回目の追肥(そさいS 5 4 0)は、茎葉5～6枚時に施用する。

注3：追肥(NK化成)は、1回目の追肥の20～30日後に2回目を、2回目の追肥の20～30日後に3回目を施用し、それぞれ30kg/10a(2回目と3回目で計60kg)施用する。

2 耕起、畝立て

1)土壤改良資材散布

苦土石灰、ようりんを全面散布(量は、施肥例を参照)し、できるだけ深く耕起する。堆肥は畝間に施用する。

2)畝立て

植え溝を条間60cm×幅30cm×深さ20cm程度に掘り、基肥(量は、施肥例を参照)を施用後、溝を埋め植え床を作る。地温が15以上確保できた状態で定植できるよう早めにマルチを張っておく。また、排水対策として、額縁排水溝を設置しておく。

3 定植

1)時期

4月下旬～5月上旬

2)種芋消毒

根茎腐敗病の予防のため、分割した種株は殺菌剤で消毒を実施しておく。

時期は植付前とし、浸漬処理した場合はその後陰干しして水を切り、表面が十分乾燥した後定植する。

3)栽植方法

小しょうが群：畝幅45cm×株間25cm 1条植え = 8,900株/10a

総種株必要量：40g/種1株×8,900株/10a = 356kg/10a

中しょうが群：畝幅60cm×株間25cm 1条植え = 6,600株/10a

総種株必要量：60g/種1株×6,600株/10a = 396kg/10a

大しょうが群：畝幅60cm×株間30cm 1条植え = 6,000株/10a

総種株必要量：100g/種1株×6,000株/10a = 600kg/10a

4)定植方法

植え床に10cm程度の植え溝を切り、種株をやや斜めにして植え、3～5cm覆土する。

4 土寄せ

茎葉 5 ~ 6 枚時（露地普通栽培で 6 月下旬頃）に追肥と同時に中耕・土寄せを行う。土寄せ量は、1 回当たり 2 ~ 3 cm とし、その後 20 ~ 30 日間隔で計 3 回土寄せする。一度に大量の土寄せをすると塊茎の形状を悪くする（「生理障害による奇形」の項参照）ので適量を守る。

5 かん水、しきわら

- 1) 高温・乾燥が続いた場合、土壌が乾燥しないよう、適時かん水する。目安としては、pF で 2.0 を越えない程度の管理とし、特に梅雨明け以降は注意する。
- 2) スプリンクラ - 等かん水設備を設けることが望ましい。また、1 回目の土寄せ後にしきわらを行い、乾燥を防止する。

6 収穫

- 1) 収穫時期 根しょうが、貯蔵用（種しょうが）しょうがは、13 以下の低温に一定期間以上遭遇すると貯蔵中に腐敗しやすくなるので、10 月中、下旬から 11 月上旬までに掘り取る。一般的には、乾物重が増加し茎葉が低温でやや黄化枯死し始めた頃が目安となる。（葉しょうがは、茎葉が 3 ~ 4 本分けつした頃で草丈 25 ~ 30cm。葉付き根しょうがは、分けつ茎葉 10 ~ 20 本の頃に収穫する。）
- 2) 方法 根しょうがとして直ちに出荷する場合は、根株を手で抜き取り、茎葉と根を取り除いて陰干ししておく。種用として貯蔵する場合は、塊茎に茎を 2 ~ 3 cm つけて切り取り、根はそのまま残しておく。
- 3) 貯蔵 収穫した根しょうがは、直ちに出荷する以外はいったん貯蔵する。掘り取った根しょうがを、20 日間土中に仮伏せし、残った茎や根を取り除く。その後、コンテナに入れ、無病の赤土や砂を塊茎の間に詰め込み、15 の貯蔵庫で管理する。この後に計画的に出荷を行うか、翌春まで貯蔵し種株とする。

7 調製

- 1) 粗調製 茎葉、ひげ根をきれいに取り除き、よく水洗いし、陰干しする。
- 2) 格別品分別 奇形、有傷、病虫害のあるものを取り除く。
- 3) 箱詰め 大小区分に従い 5 kg 入りの段ボールに入れる。

表 品位区分及び大小区分（例）

品位区分	A		B
		・無傷、無病で肥大の良いもの ・乾燥していないもの ・病虫害の痕が無いもの	
品位区分	大小区分	1 カケラの重量	1 カケラの形状
A	2 L	500g 以上	1 コブ 100g 以上 1 カケラ 4 コブ以上
	L	200g 以上	1 コブ 50g 以上 1 カケラ 4 コブ以上 (3 コブ 200g 以上も可)
	M	150g 以上	1 コブ 45g 以上 1 カケラ 3 コブ以上 (2 コブ 150g 以上も可)
	S	100g 以上	1 コブ 35g 以上 1 カケラ 2 コブ以上 (1 コブ 100g 以上も可)
B	L	200g 以上	1 コブ 50g 以上 1 カケラ 4 コブ以上 (3 コブ 200g 以上も可)
	M	150g 以上	1 コブ 45g 以上 1 カケラ 3 コブ以上 (2 コブ 150g 以上も可)

・本県での標準出荷規格は無い（平成 17 年 12 月現在）ので、上記を参考にする。

病虫害防除

1 根茎腐敗病

しょうが栽培での最も重大な被害を及ぼす病害。主に根茎が侵され、株全体に感染が進むと地上部も侵される。発病した根茎は最初は黄褐色を呈するが、その後水浸状に軟化腐敗し、表皮だけを残し、茎の中が空洞になる。夏季が多雨の年に発生しやすい。種株から病原が持ち込まれることが多く、対策としては、種株消毒のほか、連作を避け、排水の良いほ場で栽培する。また、発病株は直ちに除去しほ場外で埋めるが焼却処分する。

2 いもち病

葉に淡褐色の小斑点を生じ、やがて拡大して楕円又は不正形の病斑となる。この頃の病斑の中央は灰色になり年輪状の紋を現すようになる。激しく発病すると葉全体が褐色に枯れあがる。多雨の年に発生しやすい。対策としては、薬剤防除のほか、多肥栽培、日陰での栽培を避ける。

3 アワノメイガ

茎葉に穴を空け幼虫が侵入し、虫ふんがその穴から出ているため、発見しやすい。小発生の際はさほど問題とはならないが、多発した際には、茎が枯れ、被害が拡大してから防除しても効果が少ない。対策としては、発生初期の薬剤処理の他に有効な手段は無い。

生理障害による奇形等

1 いかりしょうが

土寄せの遅れや土量の不足が原因で2次茎が萌芽したもの。

2 昇りしょうが

根しょうがの形状が縦長になるもの。土寄せ量が多すぎた場合に発生する。

3 水しょうが

根しょうがの肉色が褐変する。土壌水分が過多の場合に発生するので、排水に注意する。

販売のポイント

1 店持ちを向上させるため、降霜前に掘り取り、掘り取り時には塊茎を乾燥させない。

2 消費は安定しているが、需要量はほぼ一定しているので、買い手側と協議した定量での長期出荷を狙う。